進振り制度の陰日向！前編（教育コラム）

日本の一部の大学には入学時に学部や学科が決まっていない大学があり、入学後に進路や専門・専攻を決めることの出来る、所謂「進振り制度」と言う仕組みがあります。「Late Specialization」とも表現するそうです。もちろん、入試時点でも学部学科を決めての受験ではありません。

主な大学に、国立では東京大学・北海道大学、私立では国際基督教大学（ICU)、学部を決めて受験・入学し、その後専攻や学科を決められる大学としては、国立大学では京都大学・名古屋大学・東京工業大学、私立では早稲田大学・慶應義塾大学などが挙げられます。

そこでまずは進振り制度の日向の部分、メリットについてお伝えしようと思います。入試前の時点、つまり高校生までの段階で考えると、将来の進路を決めかねている子には良い選択肢になると思います。「自分が本当にやりたいことって何だろう？」「そもそも大学で何が出来るのか、何が学べるのか分からない？」と思う子どもは多いと思います。私事ではありますが、私が外国語大学を希望して受験し入学した理由は、たまたま

高校 1 年生の夏休みに保育園時代からの同級生にニュージーランドへの短期留学（約 2 週間）へ一緒に行こうと誘われたことがきっかけです。当時ラグビーをしていたこともあり、ラグビー強豪国の NZ に行けることはその点でも嬉しかったです。また、両親に相談したところ、今自分自身が子どもの教育費で多くの費用を負担しているからこそ身に染みて感じますが、それなりの費用にも関わらず快諾しくれたことも大きな要因です。そしてまた、その留学の前？後？（はっきりとは覚えていないのですが）、同級生のお姉さん（当時大学生）が教育実習生として英語の授業を担当していて、お昼休みなど大学生活ってどんな感じですか～？と質問してみたりして親しくなったことも外国語に興味を持ったきっかけであり、その教育実習生が通っていた大学が正に私が進学した大学であり、彼女はドイツ語専攻でした。と、まぁ～私の場合は単科大学だったこともあり、学部は 1 つだけ、学科つまり専攻語については正直そこまでこだわりはなく、センター試験の結果を参考にしてロシア語に決めて受験したという程度です。ただ、この進路選択も今となっては、あ～だこ～だと最もらしい理由を述べることが出来ますが、正直後付けと言うか、自分で自分自身を納得させるためにさまざまな事象をくっつけた感が、偽らぬ正直な思いです。

　つまり、人生とは後付けの理由付けでなんとなく自分自身を納得させて

いく部分は多いと個人的には思いますが、本来はそうではなく自分の進路を真剣に考える中で、最善と思われる選択をしていくことが適切だと思います。そう言った意味で、大学受験までの間に自分の気持ちに正直に誠実に向き合う中で、1 つの選択肢に絞ることが出来ない場合は大学に入学後でも選択可能な進振り制度はとても良い仕組みだと思います。またまた私事で恐縮ですが、大学選択の理由を改めて書き連ねる中で、私の感情としては高い費用を出してもらって NZ に留学させてもらった両親への手前、全く関係のない（あくまで高校当時の感覚で、実際には関係なくはないのですが）例えば経済学部や文学部などの進路選択は考え難かったと思います。私の両親は進路選択に対してのアドバイスと言うか、所謂口出しは全くしませんでしたが、そういったことがあろうとなかろうと、親からの影響というのもそれなりに大きいと思います。私の場合でも、親に何らかの忖度をしていたんだと思います。誤解のないように付け加えておくと、親からのアドバイスや口出しが良いとか悪いと言った価値判断は私にはなく、最も身近にいる大人として、比較的大きな影響を受ける・受けていたという事実です。

次に進振り制度のある大学に入学後のメリットについて、それはミ

スマッチを防げることと高度な教養を身に着けられることだと思います。はじめの方にも書いたように、そもそも大学では何が学べるのか？それ以上に自分はそもそも本当は何がしたいのか？何が学びたいのか？は正直、分かっているようで実は分かっていないことの代表的なものだと個人的に思います。本当は・・・と言う表現は少々難しくて、本当のこととは自分しか分からない筈なのですが、その肝心な自分が実は自分自身のことを意外と分かっていないと言うことだと思います。そのため、人は他者からの評価と言うか、他者から言われたことを自分の特徴として認識しているのだと思います。もっと言うと、だからこそ人から良く見られたいと言う感覚になるのだと思っています。まぁ、要するに最後は自分で決めないといけないことではあるのですが、大学入学後にある程度、大学とはどういった場所で何が学べて、自分はこれを専攻してもいいかなぁ～と、実際に経験する中で判断、選択出来ることはメリットになると思います。

　また、数年前経団連会長が新卒の社会人に求める能力として言われていた「語学と『一般教養』」は、確かに学生時代にその基礎が出来上がると思います。海外の大学ではよくあるようですが、大学に入ると１つのテーマに対して大量の書籍を読み、それに対するディスカッションやディベート、レポート提出、そこから身に付ける教養は、将来必ず役に立つと個人的に

も強く感じています。ちなみに、カナダ人の友人に聞くと、大学入学時点、もちろん大学入試時点で、文系・理系の区別は無く、大学入学後に所謂一般教養を身に付ける授業は文理関係なく多くの時間を割くそうです。その際にやはり多くの書籍を読むそうです。日本の大学でも進振りを決める前に、一般教養（ジェネラルアーツ）を学ぶことで、先程も述べた自分自身は本当は何がしたいのかの選択幅が広がるように感じます。入学後の約 2 年間、実質的には 1 年半で特定の専門分野に特化した学びではなく、幅広い一般教養的な学び（ここでは敢えて一般教養**的**と表現しています。理由は日本の大学の場合、入学時に既に文理の区別がある分、それぞれの境界を越えるような、本当の意味での一般教養は学びにくいと捉えているからです。文系は文系の一般教養、理系もしかり）を経て、大学生と言う所謂大人の仲間入りをする中での交友関係や、人生の中で恐らく最も自由な時間かつ動ける体を持って経験して得た知見など、さまざまな角度から専攻を選択出来る点はやはり大きなメリットになると思います。

そして陰日向の**「陰・影」**の部分についてですが、いつものようにそれなりの分量になってしまったので、後編として次に回したいと思います。次回まで少々時間がありますが、進振り制度の期間のように実質 1 か月

半、皆さんに上手く伝わるように、そもそも何が伝えたいのか、何が私に伝えられるのか、を考えながら仕事の合間に書籍やネット、人脈を使って情報収集と文章作成の時間とさせていただきます。楽しみにしていただければ幸甚です。

ソニー生命保険(株)　大分支社
〒　870-0029　大分市高砂町 2-50
オアシスひろば 21　9 階
℡　097-532-9200
ライフプランナー　山田新悟